

[第26回]

NCGG-RI 研究発表会

National Center for Geriatrics and Gerontology, Research Institute

上皮バリア機能に着目した老化・感染・炎症・免疫制御と歯周病予防・治療戦略

口腔疾患研究部

松下 健二 部長

2018年2月13日(火) 16時00分～

第1研究棟2階大会議室

感染症は病原体の病原性と宿主の抵抗力の相互作用、いわゆる host-parasite relationshipにより成立する。歯周病も口腔バイオフィルムに起因する慢性炎症性疾患であるため、その制御には双方の因子を考慮する必要がある。加えて、歯周病は中年期以降に有病率と重症度が増加することから、口腔環境あるいは口腔組織の加齢変化もその病態形成に深く関与することが示唆されているが、その詳細な機序については不明である。

口腔環境・組織の加齢変化は、炎症反応および免疫応答の量的および質的变化を来す。慢性的な細菌刺激やストレス応答は特異免疫応答の低下や過剰な炎症反応を惹起し、場合によっては自己免疫症状を引き起こす。また、そのような宿主側の変化は口腔バイオフィルムの毒性にも変化を及ぼし、それらの変化が相まって歯周病の病態を増悪する可能性が考えられる。

我々は、このような病原体と宿主の相互作用を制御するためには、そのインターフェースに存在する口腔粘膜が正常であることが重要であると考え、口腔粘膜バリアの維持・向上による歯周病の制御の可能性について検討している。歯周病原細菌は上皮バリア機能を障害する。また、老齢マウスの歯肉では、上皮バリア関連タンパクの発現が低下している。そこで、我々は上皮バリア修復法について様々な角度から検討を行っている。本セミナーでは、それらのongoingの研究成果について紹介したい。

座長：今井 剛

連絡先：副所長室(内線5002)